

総 括 研 究 報 告

主任研究者 鴨 下 重 彦*

1. 研究目的

平成元年度より心身障害研究の新しい班として発足した当班は、複雑な機構である神経と感覚器の発達に関する諸問題に取り組むとともに、その障害の早期発見、チェック方法、予防対策などについて提言を行うことを目的としている。

2. 研究組織

初年度は以下のような4班で分担研究を進めることとした。各分担研究には5～12名の協力者が参加した。

- 1) 障害児の発生予防対策と療育対策との連携に関する研究 (分担研究者 鴨下 重彦)
- 2) ハイリスク児の発達チェック方法に関する研究 (分担研究者 前川 喜平)
- 3) 小児の視覚発達の評価法に関する研究 (分担研究者 丸尾 敏夫)
- 4) 聴覚・言語障害、その発見と対策 (分担研究者 田中 美郷)

それぞれに期待される研究内容は以下の如きものであった。

- 1) 障害発生予防対策と障害児療育対策との間を結ぶ(障害が固定する前の)望ましい療育システム構築に向けての提言(いわゆるグレー・ゾーン対策も含む)
- 小児慢性疾患ハンドブックの取りまとめ(神

経・筋疾患編)

***グレー・ゾーン対策**

- 2) 乳幼児健診の発達チェックの充実に向けて、さらには、「発達クリニック」的な事業を実施する場合の、技術面の基盤作り(平山班でのシステム面からの研究と補完し合う)
- ハイリスク児の発達チェック法のマニュアル作成

***周産期医療施設ネットワークでの小児の発達の中・長期的フォローアップ・スタディー**
(周産期、新生児の分野の研究とのタイアップが重要)

- 3) 乳幼児の健診における視覚のチェック、検査システムのあり方への提言

***視覚のチェック**

- 4) 乳幼児の健診における聴覚のチェック、検査システムのあり方への提言、乳幼児健診の言語発達面のチェックの充実に向けての提言

***聴覚・言語のチェック**

3. 研究成果

- 1) 今年度は全体の研究計画と小児神経難病ハンドブックの執筆内容の検討、項目の選定、執筆者を決定した。また各個研究を通じ、障害発生の早期発見と予防の望ましい体制のあり方を考えた。グレー・ゾーンという言葉が

*東京大学医学部小児科

何を意味するか、その定義付けを試みたが、実際には乳児健診や診療の場でしばしば経験されるものとして共通のイメージを得ることが出来た。

- 2) 従来不明確であったハイリスク児の定義、概念、その診察法について明らかにし、フォローアップ・スタディーが必要であり、研究協力者によりその際のチェックポイントの原案と具体的な体制が作られた。

ハイリスク児を診療するための手引き書について、内容などの検討がなされ、その原案が作られ次年度以降具体的執筆にとりかかることになった。

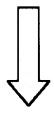
- 3) 視覚発達については、特に3才児における視能のチェックをより正確、効率的に計る方法を立案した。次年度以降、実施を試みなが

ら、さらに必要な手直しを加えてよい方法を確立する予定である。

- 4) 聴覚については従来の健診のあり方の問題点を検討し、試しにささやき治療を提唱、3才児健診での応用が可能であることが明らかになり、次年度以降さらに検討することとなった。

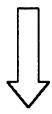
4. まとめ

神経・感覚器の発育期の諸問題は複雑であり、その対策も容易なものではないが、上述のように各分担研究班とも積極的に問題に取り組み、初年度としてのある程度の成果と今後の方向づけが行われた。次年度以降の成果に期待されるところである。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 研究目的

平成元年度より心身障害研究の新しい班として発足した当班は、複雑な機構である神経と感覚器の発達に関する諸問題に取り組むとともに、その障害の早期発見、チェック方法、予防対策などについて提言を行うことを目的としている。